

Title	フッサール・アルヒーフを訪れて
Sub Title	
Author	山本, 万二郎(Yamamoto, Manjiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1959
Jtitle	哲學 No.37 (1959. 12) ,p.81- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000037-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フッサール・アルヒーフを訪れて

山本万二郎

一九五八年四月から六ヶ月の滞欧中、約三ヶ月をベルギーのルーヴァンで過した。というのは、ルーヴァンには私の渡欧の最大の目的であるフッサール・アルヒーフ (Husserl-Archiv) があるからである。当地ではそれをフッサール・アーシーク (Husserl-Archives) 又はフッサール・アーカイフ (Husserl-Archief) と呼んでいる。ルーヴァンにはその本部が置かれ、独仏にはその支部が置かれているが、その後ヨーロッパ旅行の際支部をも訪れて来たので、それらの模様について述べて見たい。

ルーヴァンはブラッセルの東方電車で約三十分の所にある小都市である。駅に降りると市の中央にある市庁まで真直に途が通じている。大学は各学部とも散在しているが、哲学研究所 (L'Institut supérieur de Philosophie) はその市庁の所から左へ折れて約三分位の所の右側にある。その正門の一寸手前の左側の少し離れた所に大学の図書館がある。そこまでの広場には花壇があつて美しい。又正門一寸手前の右側には公園があつて、大木の並木、うつさうたる樹木、目にしみる様な緑の芝生などが印象的である。

さて大学の門を入ると直ぐ左側にレイマッケル (De Raeymaeker) 同研究所長の家があり、それに続いて同大
学教授達のアパートや研究室がある。右側には同大学附属の出版所があり、その一寸先に同大学設立者メルシエ

フッサール・アルヒーフを訪れて

(Mercier) 教授の塑像がある。この様な建物を左右に見て行くと正面に三階の建物が有り、それが同研究所である。その入口の左側が教場で、その二階が講堂、入口の右側が書庫と読書室、その二階は研究室、その三階が文庫理事長を兼ねるヴァン・ブレダ (Van Breda) 教授の研究室を兼ねたフッサール文庫研究所である。

同所を訪れて、多年待望のフッサール原稿を初めて目前に見た時には感激して胸がふるえた。同教授は大綱を握り、細い事は助手のボエーム氏が何かと世話してくれた。同所は正午から二時迄は休憩、夕七時閉鎖する。従つて朝九時頃から夕七時迄、毎日の様に通つて、原稿を読むのを楽しみにした。

ルーヴァンに同研究所が設立された事情については、フッセリアーナ全集第一巻の序文に詳しく出ているが、(拙訳フッサール「現象学序説」デカルト的冥想録の序文にも紹介しておいたが)、簡単に述べると、フッサールが一九三八年四月フライブルヒで永眠した時、多くの蔵書と約四万五千ページの未刊原稿を残した。関係者はその散佚をおそれたが、ドイツ国内では安全に保存出来なかつた所、幸い一九三九年ブラッセルのフランキー財団の後援を得て、ルーヴァン大学の哲学研究所内にフッサール文庫研究所を設け、そこにその全部を保存することになったのである。それについて委員会が設けられ、その理事長にヴァン・ブレダ (Van Breda) 教授が選ばれ、その運営にフッサール最後の弟子であるフィンク (Fink)、ランドグレーベ (Landgrebe) 及びその他ゲルバー夫人 (Gelber)、ビームル (Biemel)、シハートルッサー (Strasser)、及び後述のボーム (Boehm) の諸氏が協力することになった。

同研究所の仕事は、大体三つに分たれてゐると思はれる。その中最も重大な中心的仕事は、フッサールが原稿を多く速記体の記号で書いて居るので、それをドイツ文に翻訳することであるが、それがいまだに完成してゐない。勿論フッサール自身がタイプで打つたものも、又筆記体で書いたものもあるが、その大部分が速記体である。而し

てそれをドイツ文に翻譯したものをトランスクリプションと呼んでいる。その第二の仕事は、かゝるトランスクリクションを編纂して出版することであり、第三は内外の研究者のため便宜を計ることである。

同研究所の構成については、前述の如くルーヴァンにその本部をおき、現在その支部がドイツのフライブルヒとケルンの両大学、フランスのパリ、ソルボンヌ大学、アメリカのバッファロー大学の四ヶ所に設けられてある。而してルーヴァンの本部は前述の委員会の外ブレダ教授を理事長として、フッセリアーナ第七巻の編纂者であるボエーム夫妻が助手を勤め、フライブルヒではフィンク教授が主宰し、シュミット (Schmidt) 氏が助手を勤め、ケルンではフォルクマン・シュルック (Volkmann-Schluck) とランドグレーベ (Landgrebe) 両教授が主宰し、フッセリアーナ第二巻から第六巻までの編纂者ビームル夫妻とシュレーデル (Schrüder) 氏とデイエム女史 (Diem) とが助手を勤めている。ソルボンヌではリクール (Ricoeur) 教授が主宰しジャン・ヴァール (Jean Vahl) 教授が協力している。フランスでは初めストラスブールに支部がおかれてあつたのであるが、リクール教授が数年前ストラスブールからソルボンヌに移つた際、同時に支部も移つた模様である。ルーヴァンでは固より、フライブルヒでもケルンでも、フッサール・アルヒーフとしての特別の設備を小規模乍ら有している。ケルンでは大学附屬の研究所の中にあり、フライブルヒでは大学内の研究室の一つを当ている。しかしソルボンヌではトランスクリプションが図書館の一隅にその他のものと共に保存されているだけで、何も特別の施設がない。又その管理事務も館長が直接代行している。又そこに保存されているトランスクリプションの量も他と比較して充分でない。アメリカのバッファローについては、アメリカには行かなかつたのでよく解らないが、ファーバー教授が主宰していることだけは明らかである。尙同研究所の同人とでも言うべき人達の中には、前述の外にベルギーではド・ヴァーレン (De Waelhens)

ペレルマン (Perelman)、フランスではヒッポリット (Hypolite) ベルチエ (Berger) サルトル (Sartre) 及び最近メルロー・ポンティ (Merleau-Ponty) も加入した。

さてこの様な構成の下に、各支部ともトランスクリプションの一揃をそれ／＼所有して本部の仕事に協力しているのであるが、同研究所の第一の仕事は主としてルーヴァンとケルンで、従つてポエーム及びビーメル の両夫妻の許で行はれている模様である。尤もこの速記体の翻訳の一部は既に一九一六年以来フッサール自身がフィנק、ランドグラレーベ、エディット・シュタイン (Edith Stein) の三名を助手として企てたものであるが、一九三九年以来同研究所の仕事として引受ける事になつたのである。而してフッサールの生前行はれたものも更に厳密に再び翻訳し直している。第二の仕事も私の見聞した所では主としてルーヴァンとケルンで、それにフライブルヒが協力していると思はれる。その成果がフッセリアーナ八巻の刊行となつて表はれたわけである。その他只今ケルンで現象学的心理学の部分が準備されている筈である。更に時間構成の部分も近く刊行される筈である。これは私が丁度ルーヴァンに居る時既に校正に入つていた。その他論理研究の増補改訂版、というのはフッサールの書込みを本文に挿入したものがフライブルヒで準備されているが、これは少し遅れる模様である。更に今年にはフッサール生誕百年に当るのでその記念号 *Phaenomenologica* が別冊として出版される筈である。フッセリアーナ関係の刊行は今の所それまでの計画との事である。尙フッセリアーナ出版によつて最初四万五千ページの未刊原稿であつたのが、現在尙未刊として残つて居るのは大体三万ページ位との事である。第三の仕事については本部支部とも来訪の研究者のためトランスクリプションの閲覧の便を計つて居る。しかしその閲覧の規約が大変嚴重であつて、そのトランスクリプションの全文を写す事は勿論許されず、その一部を引用するにしても一定の限度があつて、その限度を越える

場合には一つ一つ許可を得る必要がある事になつてゐる。それでも私の居る間に各国から数名の来訪者があつた。尚ルーヴァンでは毎週火曜の夜七時から関係者が集まつてフッサール現象学についてのセミナーを開くが、私の居る間はイデーンを使用していた。そのメンバーの中にはヴァン・リエ (Van Rie) 教授もいた。これはいはば高度の研究會であるが、同大学の授業要目の中に原稿講読というのがあつて、学生にも原稿を研究させてゐる。同研究所は前述の如く哲学研究所の建物の三階にあるが、フッサールの原本原稿即ちオリヂナルはその室の中の金庫の中に大切に保存されている。更に第三の仕事に属する事として国際的現象學會議 (Kolloquium) を開いてゐる。第一回は一九五一年ブラッセルで、第二回は一九五六年ドイツのクレッフエルドにて、第三回は一九五七年フランスのロワイヨールモンで開いてゐる。第四回に該当するものを、去年九月ヴェニス第十二回國際哲學會議の終了後同地で現象學シムポジウムとして開く筈の所、都合により取止めになつた。尚かゝる會議を開く外、研究のため著名人を招聘して講演を依頼する事も行う。同研究所とケルン大学共催の下に、一九五二年一月から一九五三年二月までに十四人の講演を行つた事を報じてゐる。支所の中ケルンとは特に密接な關係がある様である。

さて次に原稿の分類であるが、今までに同研究所のことや原稿に関して公けにされた記事は、前記一九五〇年のフッセリアーナ全集第一巻の序文の外に、私の知る所では次の三つだけである。即ちそれは一九五二年ブレーダ氏編纂の講演集 *Problèmes actuels de la phénoménologie* と、一九五三年の *Philosophisches Jahrbuch des Görresgesellschaft* の第六二卷二号と、一九五四年の *Les Études philosophiques* の第一巻に於ける何れもブレーダ氏又は同氏とポエーム氏との共同による記事である。そこに詳細な分類が出てゐる。その分類はよく出来てゐるので、それを参考にし乍ら、現に見て來た事を土台として述べる事にする。尚先に挙げたブレーダ氏編纂の講演集

というのは、前述第一回のブラッセルに於ける現象学会議の講演集である。第二回の講演集はフッセリアーナ全集と同じ出版元で準備中である。

さて原稿はA B C D E F K M P Q R Xに分類されているが、これは二つの部分に分たれ、AからFまではフッサール自らが一九三五年にその助手フィンクとランドグレーベに命じて分類させたものであり、K以下はフッサール死後同研究所にて行つた分類であつて、それは大部分前の分類の際残されたものではあるが、中には重複しているものもある。先づ大綱目を示せば次の通りである。

A Mundane Phänomenologie

B 還元

C 形式的構成としての時間構成

D 原初的構成（原構成）

E 相互主観的構成

F 講義と講演

K 一九三五年未整理のもの年代順分類

M 使用目的による分類

P フッサールについての弟子及び友人の原稿

Q フッサールの学生時代の原稿

R フッサールの往復文書

X フッサール文庫研究所記録

次にAからMまでの細目を挙げれば、次の様である。

A

- I 論理学、形式的存在論 四一篇
- II 法哲学 一
- III 存在論（形相論とその方法論） 一三
- IV 科学論 二三
- V 志向的人間学（人格と環境） 二六
- VI 心理学（志向性の理論） 三六
- VII 世界統覚の理論 三一

B

- I 還元への途 二八
- II 還元そのものと、その方法論 二三
- III 暫定的な先験的志向分析 二二
- IV 現象学の歴史的体系的な自己性格批判 一一
- C 形式的構成としての時間構成 一七
- D 原初的構成（原構成） 一八

フッサール・アルヒーフを訪れて

E

I 直接的他我経験の構成原理論

七

II 間接的他我経験の構成（完全な社会性）

三

III 先験的人間学（先験的神学、先験的目的論、先験的倫理学等）

一一

F（K・Mと重複するものが多い）

I 講義とその部分

四四

II 講演とその部分

七

III 出版された論文の原稿と附録

IV 断片

K

I 一九一〇年以前

II 一九一〇—一九三〇年 歴史の問題

III 一九三〇年以後 危機の問題

VIII 既刊の別刷

X 欄外註

M

I 講義用

- 1 一九一七年 初学者のための現象学と認識論
- 2 一九二二—一九二三年 哲学入門についての講義
- 3 一九二三—一九二四年 第一哲学
- 4 一九二五年 「論理研究」の任務と歴史的意味、「イデアチオン」(現象学的心理学の研究)

II 講演用

- 1 一九三一年 現象学と人間学(ベルリン)
- 2 一九二二年 ロンドン講演
- 3 一九二四年 カントと先験的理念(フライブルヒ)
- 4 一九二九年 デカルト的冥想録
- 5 一九三一年 その附録—インガルデン
- 6 一九二九年 パリ講演 (その他Fには、アムステルダム講演—一九二八年、及び日本の改造所載の論文—一九二三年が含まれる。)

III 出版用

- 1 一九一五年 イデーン第二巻
- 2 一九二三—一九一四年 論理研究 改訂計画

フッサール・アルヒーフを訪れて

- 3 一九〇〇—一九一四年 意識の構造の研究
- 4 一九二三年 「改造」所載論文
- 5 一九三五年 プラード講義、ヴィーン講義、危機、歴史哲学

以上

○お断り 本稿は一九五八年六月五日、日本哲学会にて「特別報告」せるものの一部に加筆せるものである。